

連載・身近にある文化遺産

日光の石仏たち

ほとけ

第六回 不動明王（護摩壇つき）

お不動さまは観音さま地蔵さまと並んで、私たちに親しい仏さまです。仏像はインドで生まれ、中国を経て日本に伝わってきました。観音さまは大乗仏教の国では、どこでも人気があります。しかし、インドや中国では日本のようなお不動さまや、地藏さまの姿は見られません。

もちろんインドにも中国にも不動尊はあります。インド・ネパールでは、不動尊とは気づかないくらい形が違います。中国は、日本と大分近い形です。しかし九世紀前半に仏教弾圧があったので、不動尊は充分普及せず、わずく三体の石像が博物館にあるだけです。お不動さまの信仰は日本独自の発展をしました。

仏さまには四種あることは、第一回四月号で説明がありました。如来は仏さまそのものです。菩薩は如来が偉すぎて近づきに

くい人たちに、もつと身近な姿で優しく導きます。明王はなかなか教えを聞き入れない人たちに、恐ろしい姿で威力をもって説き伏せるのです。だから忿怒相といって怒った恐い顔をしています。その明王の代表が不動尊です。あと仏教を守護する天部（バラモン教の神々が仏教に取り入れられたもの）があります。

不動明王は空海が教王護国寺に祀つたように、その強大な威力で国を護るためのものにした。あるいは貴族階級の安産や治病の祈禱の対象ともなりました。やが

て、修験者たちが不動明王を中心に護摩行を行うようになってから、広く庶民に受け入れられるようになりました。修験と不動尊とは密接な関係があるので、日光にお不動さまが多いのはそのためです。日光は勝道上人の時から、峰修行が盛んでした。また日光山座主の弁覚法印



四本龍寺の不動尊像



四本龍寺の護摩壇

（源実朝の護持僧）は吉野・熊野で修行し、日光修験を隆盛に向かわせました。室町時代が日光修験の全盛期です。秀吉の弾圧で日光山は一時衰退しましたが、天海以後また復活され、人峯修行も盛んに行われました。日光修験の四季の入峯行事を総称して「三峯五禪頂」といいますが、その出发点である四本龍寺に本尊の不動明王立像と立派な護摩壇が残されています。鳥居の銘文から正徳元年（一七一）に寄進されたことがわかります。春の華供峯はここから古峯原に行き、地藏岳から細尾峠